

季刊わたぼうし

NO.85
'10夏

お出かけ企画

ライトレールで行く富山市岩瀬浜Ⅲ

宮田 比呂雪



作業着が汚れ

今日生きた証拠に



今回の目次

※お出かけ企画・ライトレールで行く岩瀬浜Ⅲ

- ・ライトレールで行く岩瀬浜の企画書 2
- ・初夏の岩瀬浜を散策 3
- ・岩瀬浜駅に到着、岩瀬浜港の散策 3
- ・富山ライトレールの歴史 3
- ・岩瀬浜散策、御料亭「松月」 4
- ・飛びだんごの「七福亭」 4
- ・岩瀬浜町内散策光景 5
- ・北前船回船問屋「森家」 5
- ・北前船とは？、久保陶器店 6
- ・ライトレール競輪場駅 6
- ・「ライトレールで岩瀬浜」の企画を振り返り 6

※第55回石川県身体障害者社会福祉大会

- ・記念講演「地域で生活したい！」Ⅰ
講師：平井 誠一氏 7

※地域サポートハウス・楽生の地域交流レポート

- ・七尾市一本杉「花嫁のれん展」に出店 11
- ・第2回らっきいまつり 11

※マイ・ブックスルーム

- ・しあわせがみえるメガネ 12

この機関紙は障がいのある人、ない人が自由に考えを出し合い、主義・主張を越えて、お互いを理解し合う中から共に生きる豊かな社会を作っていくことを目的として発行しています。

お出かけ企画・ライトレールで行く富山市岩瀬浜Ⅱ



ライトレール始発駅・富山駅北

以前「自立生活支援センター富山」において10日間の自立生活体験を行った時に、新しく富山市内に走った「ライトレール」に乗ってみました。

今回は「ライトレール」の紹介を兼ねて、駅周辺のバリアフリー状況、観光地としての自然の紹介、おいしい飲食店のメニュー、車いす利用者が気軽に利用できる飲食店の紹介などをやってみたいと思い、「自立生活支援センター富山」と友人の協力をお願いして取材を行いました。

【目的】

①「H S K 季刊わたぼうし」は外へ自ら出かけて体験を行い、取材した記事も掲載する。

② J R 富山駅から「富山ライトレール」の富山駅北までの移動手段のレポート報告。終着駅の岩瀬浜の観光地散策、歴史散歩、車いすで利用可能な飲食店のレポート報告。

【富山ライトレールとは？】

愛称・ポートラム。2006年4月29日開業。地域に密着した安全・安心・快適で環境にやさしい公共交通。

バリアフリーの低床車両を導入。車いすやベビーカーでも楽に乗り降りできます。

路面電車は道路混雑緩和や交通事故の削減、二酸化炭素や窒素化合物の削減などに効果がある環境にやさしい乗り物です。(HPより)

【取材(1)の日程】 2008年5月15日(金)

【取材者】編集者：桶屋 善一

【取材協力者】自立生活支援センター富山

職員2名、介助者1名

【当日のスケジュール】

AM7:30 青山彩光苑出発

AM8:05 J R 七尾駅発一

J R 金沢駅で乗り換え

AM10:20 J R 富山駅着

AM11:00 富山駅北よりライトレール乗車

AM11:34 岩瀬浜駅到着、海水浴場散策

PM12:00 岩瀬カナル会館で食事

PM1:00 東岩瀬駅までの2駅分を徒歩散策

PM2:33 東岩瀬駅よりライトレール乗車

PM2:55 ライトレール、J R 富山駅到着

PM3:55 J R 富山駅発一

J R 金沢駅で乗り換え

PM7:02 J R 七尾駅到着

PM7:30 青山彩光苑到着

【取材(2)の日程】 7月7日(火)

友人と不足の富山駅周辺の写真撮影。

初夏の岩瀬浜を散策しました

前号までライトレールに乗車していましたが、やっと富山駅北から岩瀬浜駅に到着しました。乗車時間は約23分。

岩瀬浜は富山市岩瀬天神町45番地にある富山ライトレール富山港線の駅。駅近くに岩瀬カナル会館があり、休日には多くのイベントが開催されます。

岩瀬浜駅に到着



岩瀬浜駅に到着したポートラム



岩瀬浜駅正面



センター職員の案内で岩瀬浜港へ

岩瀬浜港の散策



岩瀬浜港の岸壁



岩瀬浜港に停泊する漁船

肌寒さを感じながらも、初夏の潮風のおい、静かな波音を味わうことが出来ました。

富山ライトレールの歴史

大正13年に富岩鉄道（富山港線）の（岩瀬浜－富山口）が開通し、昭和3年に富山駅まで延伸し国鉄と連絡します。昭和18年に国鉄に移管され現在の富山港線と名称が変わります。

平成15年には路面電車化が決まり、将来的には富山駅南の市内電車との連携による利便性の向上が期待されています。平成18年にはJ R西日本から富山ライトレールへ移管され、次世代路面電車として2両編成のポートラムの運行が岩瀬浜－富山駅北間で始まりました。

（富山市のホームページより引用）

岩瀬浜散策

これから岩瀬浜商店街の散策に入ります。
残念ながら街全体が古い作りになっており、
車いすで入れるお店がありませんでしたので、
ホームページで調べました。代表的なお店と
歴史を紹介します。

企画の準備をしているとき、とても豪華な
料理がホームページに紹介されていたので、
高価で食べられなくても、豪華な料理サンプ
ルが見られると思っていましたが、それもなく
残念でした。

住 所：〒931-8364 富山市岩瀬港町116

電 話：076-438-1188

御料亭「松月」



富山港の東、岩瀬のハマを運河沿いから小
路へ入りますと、しっとりとした佇まいを見
せる 松月は創業明治44年の老舗料亭。

平成7年に建物の再生工事を行い、昔の面
影を今に残すよう90年前の建物を利用してい
ます。

岩瀬名物・飛びだんごの「七福亭」



何でも、飛んできた武士がこのだんごを食
べて魔物を退治したという由緒あるだんご。

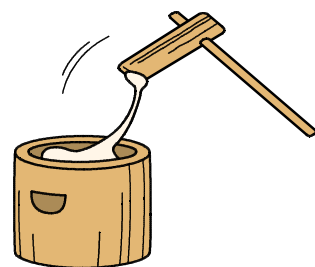
創業以来150年作り続けている‘飛び団子’。
以前は岩瀬地区で何軒もあったが現在飛び団
子をつくっているのは七福亭のみです。

段差があり店に入られないので、介助者に
買って来てもらって食べました。とても美味
しかったです。ノドにつかえないように。

問合せは、富山市岩瀬港町

TEL 076-437-9605まで

(ホームページより)



岩瀬浜町内散策光景



静かな岩瀬浜の住宅街

平日で人の通りはなく、静かでした。



介助者と地図の確認中



散策の道ばたに咲く「ツキヌキニンドウ」

ツキヌキニンドウ(突抜忍冬)

スイカズラの仲間で常緑のつる性木本。紅色の花が6月から8月にかけて咲き続けます。北米原産で明治に渡来しました。珍しい花木を発見したので、撮ってみました。

北前船回船問屋「森家」

国指定重要文化財 旧森家住宅。

明治11年頃に建てられたもので、平成6年、国の重要文化財に指定。建築当時のたたずまいを残す「東岩瀬廻船問屋型町家」の一つです。

日本海交易において活躍した北前船の回船問屋の様式が残されています。物流だけでなく、文化の交流の礎となったことが、その建築様式からも伺われます。

【所在地】

富山市岩瀬大町108

【TEL】 (076) 437-8960



北前船回船問屋「森家」正面

残念ながら、バリアフリーになっていないので車いすで入ることはできませんでしたが、古い歴史を味わうことが出来ました。

北前船とは？

江戸時代から明治時代にかけて、上りでは対馬海流に抗して、北陸以北の日本海沿岸諸港から関門海峡を経て瀬戸内海の大阪に向かう航路（下りはこの逆）、及び、この航路を行きかう船のことである。航路は後に蝦夷地（北海道・樺太）にまで延長された。



久保陶器店



住 所：富山市岩瀬大169-1

最寄駅：富山競輪場前駅

岩瀬浜の商店街、郵便局、銀行の建物は近代的なものではなく、明治時代の建物をうまく活用したお店が並んでいました。

ライトレール競輪場駅



競輪場駅は、岩瀬浜駅の一つ手前

「ライトレールで岩瀬浜」の企画を振り返り

この企画の企画書を作成して「自立生活支援センター富山」に協力をお願いしたのは2年前の秋でした。一昨年の秋に日程が決まっていたのですが、天候不順のため気候の良い5月に行いました。海辺の寒さを考えると延期して良かったと思います。

最初イメージしていた岩瀬浜は、観光地としてバリアフリーが発展していると想像していました。実際に取材してみると、岩瀬浜は住宅地として発展し、その住民が富山市街へ出るための生活路線としてライトレールが出来たようです。

ライトレールは車いすで気軽に利用できますが、岩瀬浜は車いすで入れる店も少なく、観光として行くには不向きと思いました。

次回より「富山市路面電車環状線（LRT）」の乗車体験取材の報告をします。

第55回石川県身体障害者社会福祉大会 ＝記念講演「地域で生活したい！」＝

－生活、就職、結婚、趣味、自分のしたいことI－

- ・主 催：石川県身体障害者団体連合会
- ・日 時：2009年11月15日(日)
- ・場 所：コスモアイル羽咋
- ・講 師：NPO法人自立生活支援センター富山
理事長 平井 誠一 氏(ひらい せいいち)

講師の経歴等は講演内容を参考にして下さい。



写真提供：自立生活支援センター富山

・あいさつ、自己紹介

皆さん、こんにちは。僕は昭和28年生まれの56歳です。障がいを持ったのは生まれて6ヶ月目です。家は農家でした。その頃というのは家で生まれて、育てられました。それがもとでこういう障がいになってしまったということを経験から聞いています。今日は僕の話とか、障がい者の人たちの支援を行っている中の話をしたいと思います。

僕は3歳の頃から施設に入っていました。幼稚園や小学校は施設で、病院の中にある学校に通っていました。中学校、高校は養護学校に行きました。その後は石川県野々市町末松にある国立の職業訓練校（現在の石川障害者職業能力開発校）に1年間行きました。

僕が現在やっている仕事は障がい者の自立支援です。その仕事のきっかけとなったのは母親のことかな？と思っています。僕の母親は13歳の時に亡くなりました。その頃、父は

扁桃癌でしゃべられなくなっていました。私が30歳の時に、父親は病気で亡くなりました。父親、母親、僕も含めて障がい者が3人になりました。そういう中でちょうど13才、中学校1年の時に母親が亡くなりそうになり「ちょっと、危ないから家に帰って来い」と言われ、養護学校から家に帰りました。父はいたのですが、ほとんど会話も出来ないようになっていました。

母親が亡くなったことで僕は亡くなったことに対して涙を流さなかったのです。流さなかったことに対して、家の親父とか、養護学校の先生から結構責められました。「なぜ、自分の親が死んだのに泣かないのだ」というような形で責められました。悔しかったことを覚えています。

なぜ、泣けなかった？というと、自分が十代を生きていく中で結構、考えさせられました。なぜだろう？ということを経験、中学校、高校時代に考え、もやもやしながら生きてきました。やはり、今、考えると、それは当時の施設のあり方に問題があったと感じます。僕の年代の人たちだったらお分かりだと思います。僕らの年代の頃の施設は、年に2回しか家に帰ることが出来ませんでした。お正月とお盆だけしか家に帰ることが出来なかったのです。後は面会日という形で1ヶ月に一回だけ親が来られるようになっていました。そのように幼稚園、小学校の頃を育ってきた中で親子関係が作られにくかったというところから、自分が「一緒に生きる」「ともに生きる」ということは、何だったのか？というところから、今の自分が始まっているような感じがします。

・ 20歳の時に福井県で就職(1973年)

その後、石川県野々市町にある国立身体障害者職業訓練校に行きました。なぜ石川県なのかというと、とにかく自分の中では親、そういう問題から離れたかったのかな？ということがあります。訓練校を出てからもう一つとなりの福井県へ行きました。実は就職するところがなくて僕自身は名古屋で就職したかったのですが、残念ながら断られて北陸三県内で就職を探すことになりました。最終的には福井県の印刷会社に雇ってもらい、住み込みで働いていました。

福井県では職業訓練校を出た障がい者の人たちが、僕も含めて5人が雇用されました。でも、3ヶ月後に全員が首を切られ、2人の方が去って行かれました。僕も含めて3人が、地元に戻っても仕事がないのでもう少し頑張ってみようということで、場所と印刷の機械を借りて頑張りました。

しかし残念ながら、やはり印刷というのはそんなに簡単なものではないということがあったのと、印刷会社の仕事をするというのは、こんな言い方は正しくないのかも知れないけれど、ある程度コネがないと仕事が取れないということが、すごくわかりました。それで、もうこれ以上福井県で働いていても食べていけないということで、僕は富山に戻りました。

・ 富山に戻り、印刷会社に就職。

富山の印刷会社に入りましたが、住み込みでした。そこも住み込みで働いていたのです。なぜ住み込みかといいますと、現在は自分は車いすですが、当時は歩けました。ある程度歩けたので、通勤は無理だから住み込みで働こうということで働き始めました。住み込みで働いていたとき、工場と自分の住んでいる部屋との往復だけになってしまっ、なんだ



写真提供：自立生活支援センター富山

か自分がこのまま生活していくと、地域の中に入っていけなくなるのでは、という不安感と、あと何か孤立感みたいものの様なことをすごく感じるようになって来てしまいました。

僕がいつも行っている惣菜屋、食堂、薬局のおばちゃんたちと結構、普段からお付き合いをして、そこでご飯を食べたりしていたので、そこのおばちゃんたちに「僕はアパートに住みたいのだけれど」という相談をしました。親にもしました。親は「火を出すから止めておけ」というような話とか、一人で暮らしたことがないのだから人に迷惑をかけるからやめた方が良くと言われました。

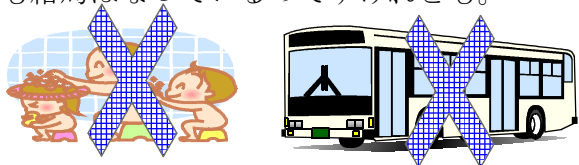
でもそのことを地域のおばちゃんたちに話しをしたら、意外にもおばちゃんたちが行動してくれました。「アパートを探して来て、保証人になってあげるから、アパートに住みなさい」と言われたのです。僕はそれをきっかけに、おばちゃんたちに助けられてアパートに住むようになりました。会社の近くでアパートを借りて、毎日、歩いて通勤をするようになっていきました。

僕の今の自分があるのは、そのおばちゃんたちの支援が、すごく自分にとっては一つのきっかけを作ってくれたな、という感じで思っています。それを今の自分の中で、働いている中で生かせないかと思って来ました。

少し働いている時の話で矛盾を感じたことがあります。現在もそんなに変わっていないかと思います。いろんな障がい者の支援をしていく中で、そんなに今も昔も変わっていないかと思います。それは障がい者の人たちが働いていると、最低賃金以下で働いている人が多いのです。僕もそうでしたが、当時は1ヶ月2万5千円から3万5千円の給料でした。

会社を辞めて失業保険を受けてみると、なんと自分自身の保険が4万5千円だったのです。それは今も変わりません。今、僕らが支援をしている人たちの中にもおられます。給料が3万円で辞めて失業保険を受けたら4万5千円だった人がおられます。「なぜだろう？」というのがあるのです。一応、制度的には4万5千円が失業保険が最低ラインということらしいです。

そういうなかで、僕は当時失業保険中ですから、生活保護に移ります。当時、生活保護が6万5千円でした。すごい矛盾を感じたのは、働いていたときの自分が収入が少ないのに、なぜ、働かなかったら収入がどんどん多くなっていってしまうのか？という疑問がすごくありました。やっぱり働くということは、障がい者にとっては評価をして欲しいことだし、もう一方で自分が働いたお金で生活をしたいという思いがあったのです。残念ながら、思いのなかで制度が全然かけ離れていくのではないかという思いがありました。そういう中で障がい者の支援に入っていくきっかけにも結局はなっているのですけれども。



やはり、70年代というのは障がい者の人たちが今よりももっと制約を受けていた時代だと思います。銭湯の入浴拒否とか、当時の国

鉄とかバスに乗ってはいけないとか、乗ったらいろいろ言われていやな思いをしたことがありました。喫茶店などに入ると「他のお客さんの邪魔になるから、入らないで下さい」と言われた時代でした。そういう時代から僕らが「障がい者がどのように生きていくのか？」ということが70年代だったと思います。

この70年代頃から「障がい者の人たちが地域で生きていこう」ということで、運動を始めて来たことがあります。地域でこだわって運動をしてきた人たちは、実は石川県でもおられました。金沢で結構、運動をしておられたその頃のメンバーは、全員が亡くなっています。



自立生活支援センター富山・正面

A. 心に残る友だちのお母さんの話

そういうなかで、僕が80年代に友だちのお母さんと会い、すごいショックだった出来事がありました。友だちのお母さんは、関節リウマチになっておられて歩けないような状態でした。膝立ちして家の中を移動しておられました。近所の人がその家に来て言われたことは「あんたとこのお母さん、いつ亡くなったの？」と言われたのです。それを聞いたお母さんは、すごいショックを受けられました。自分は死んでもいいのに近所から「亡くなった」と言われていたそうです。それからそのお父さんが、お母さんを車いすに乗せて外に出られるようになりました。やはりお母

さんとしたら、障がいがあったから外に出られなくなったけれども、自分が死んでもいい、自分はちゃんと生きているのだよ、ということ言いたかったのだと思います。



センターで仕事
中の平井氏

★消えない「地域生活への夢、あこがれ」・
・自己実現に向けて！

2000年以降、制度的には大きく変わって来ました。措置制度から選択ということで、自分たちでどこに住みたいか？どこで生活したいか？ということを選択できるという考えで言われてきたことがあります。

今は障害者自立支援法という法律で動いていますが、その前は支援費制度というものがありました。多くの方が動き始めたのは、6～7年前の支援費制度が始まった頃です。多くの障がい者の人たちが「働いて結婚したい。施設から出て自分は地域で暮らしたい。生活したい。」ということ言われました。

こうした人たちもおれば、もう一方で「友だちをいっぱい作って、同じ悩みを持った人たちの相談に乗りたい」ということで施設を出て、地域で生活をして来られた方も多くおられます。就職を実現したり、アパート暮らしを実現したりとか、障がい者同志結婚したりという人もおられます。

いつも言われるのは「地域で生活する人は軽いでしょう」と言われる人が多いです。で

も、そんなことはないです。軽い人には決断力がない人が多いです。障がいの重い人、全面的に介護が要る人の方が結構、決断が早いのですよ。だから富山では重度の障がい者の人の方が一人暮らししているかなと思います。

僕らがいつも言っているのは、第一歩は自立のイメージを持つことも1つの支援だということ言っています。思いがどれだけ強いのかということが、やっぱり一番肝心なことなのかなと思います。一番一人暮らしで反対されるのは家族です。障がい者が一番理解して欲しいのは家族なのですが、一番反対されるのは家族、親なのです。それは何故かと言われれば、昔からずっと言われてきたことなのですが「親亡き後はどうするのか。親亡き後、生活が出来るのか」と言われて、施設を選択してこられる親の立場というものがあります。

でも、もう一方で障がい者側から「小さいときから施設暮らしをしている立場から」言うとう、やはり施設以外のところで生活したい、地域へ出て生活したいと言われるのももう一方で、わかることがあります。そのあたりをどのようにしていくかという問題があると思います。

僕らが障がい者同士で支援をしていくなかで、決めていることは、僕らの支援センターとしては「親の説得はしません」ということを言っています。何故かという、僕らが説得してしまうと「言わされている。この人は操られている」と、親の方たちは思われることが多いのです。ですから「自分の声、自分の意志で親にぶつかって下さい」ということでやっています。

～次号へ続く～

一般社団法人「つながり」

らっきい

地域サポートハウス・楽生の地域交流レポート

羽咋市太田町の地域サポートハウス「楽生」が、七尾と羽咋で地域の方々と交流を行ないました。

七尾市一本杉「花嫁のれん展」に出店

「楽生」の利用者の給料を上げようと5月3～5日の「七尾青柏祭」に出店を計画したところ「一本杉花嫁のれん展の間、出店してもらえないか」と言われ、11日間の出店を行いました。11日間で**317,980**円の売り上げ。



「けいじゅ一本杉」に出店

老舗菓子店「花月」の3男ご夫婦の花嫁道中で幕開け。

11日間で地元の人たちや観光客がたくさん来店してくれて、対応にてんてこ舞いの日もありました。

「楽生名物チーズケーキは美味しいよ」と宣伝して下さる「けいじゅ一本杉」の職員の方たち。温かく出迎える一本杉の方々。



花嫁のれんも応援

すうり並ぶ「楽生商品」



第2回らっきいまつり

6月13日(日)の「らっきいまつり」は天候・人出・ボランティアに恵まれ大成功。

テーマは羽咋市太田町にこだわり「太田名物を知っているかい」「楽生」も太田名物の一つでもありたいと願って。



取材者も若い女性の介助に笑顔



よしこ&ひろみコンサート

みんなと一緒に歌い、手拍子で会場は盛り上がり、利用者とコーラスでフィナーレ。

マイ・フックスルーム

しあわせがみえるメガネ

作・紫藤 幹子 絵・谷口 周郎

発行：石川テレビ

頒価¥1,300円(本体 1,238円)

石川テレビ開局40周年記念「お母さんの童話大賞」の受賞作をまとめた一冊です。

614名の応募から、大賞と優秀賞の4作品にプロの絵を添え、一冊にまとめてあります。

今回の大賞は「しあわせがみえるメガネ」という童話で、金沢市内に在住の紫藤幹子さんが書かれた作品です。

彼女は脳性麻痺ですが、幼い頃から詩を書くことが好きで、短歌・小説・水彩画などにも挑戦し、詩集の出版、絵画展を開催しています。金沢市内の作業所に通っていて、5月に大賞受賞を記念して、彼女の様子を紹介した番組が石川テレビで放送されました。



年間協力会員募集中

この機関紙は障がいのある人、ない人がそれぞれの考えを出し合う中から、互いに理解を深め、共に生きる豊かな社会づくりを目的として、有志により発行しています。

つきましては、主旨に賛同して協力会員になっていただく方々を募集しています。

この会費で、在宅障がい者や福祉関係機関等に送付していますので、機関紙一部の料金ではなく、年間協力会費として扱っています。

年間協力会費：2,000円

会費振込先：郵便振替口座

振込先名義：わたぼうし連絡会

00750-6-9791

送 付：春、夏、秋、冬

編集後記

こんにちは。今年の梅雨も局地的な大雨が降り、七尾市では被害が出たり、梅雨明け後の猛暑、皆さんの体調はいかがでしょう？

さて、先日の参議院選挙は民主党の大敗北でした。4月から福祉サービスの利用料、車いすなどの補装具購入の負担金が一割負担から無料になりました。しかし、もし解散総選挙によって、また政権が変わり、福祉政策も変わったり、消費税が10%になったりして負担が増えないか？不安ですね。

今回の写真は、七尾市大手町の商店街を通ると七夕が飾られていたので、シャッターを押してみました。(Z.O)

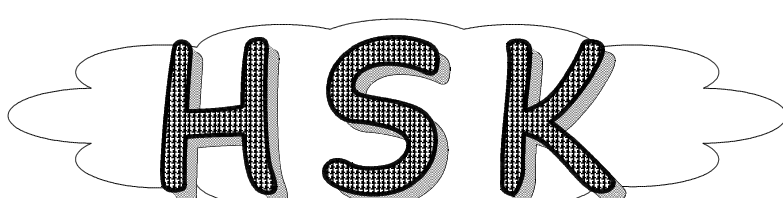


七尾市大手町「リボン通り商店街の七夕」 7/11撮影

編集及び連絡先

連絡先：zen@san9.netまで

定価二〇〇円



季刊わたぼうし

NO.85
'10夏

お出かけ企画

ライトレールで行く富山市岩瀬浜Ⅲ

今回の目次

※お出かけ企画・ライトレールで行く岩瀬浜Ⅲ

- ・ライトレールで行く岩瀬浜の企画書 2
- ・初夏の岩瀬浜を散策 3
- ・岩瀬浜駅に到着、岩瀬浜港の散策 3
- ・富山ライトレールの歴史 3
- ・岩瀬浜散策、御料亭「松月」 4
- ・飛びだんごの「七福亭」 4
- ・岩瀬浜町内散策光景 5
- ・北前船回船問屋「森家」 5
- ・北前船とは？、久保陶器店 6
- ・ライトレール競輪場駅 6
- ・「ライトレールで岩瀬浜」の企画を振り返り 6

※第55回石川県身体障害者社会福祉大会

- ・記念講演「地域で生活したい！」Ⅰ
講師：平井 誠一氏 7

※地域サポートハウス・楽生の地域交流レポート

- ・七尾市一本杉「花嫁のれん展」に出店 11
- ・第2回らっきいまつり 11

※マイ・ブックスルーム

- ・しあわせがみえるメガネ 12

宮田 比呂雪



作業着が汚れ

今日生きた証拠に



この機関紙は障がいのある人、ない人が自由に考えを出し合い、主義・主張を越えて、お互いを理解し合う中から共に生きる豊かな社会を作っていくことを目的として発行しています。

0 7 6 7 - 2 2 - 0 0 9 5

0 7 6 7 - 2 6 - 1 2 7 1

沼田さんへ

いつも、お世話になっております。

「HSK季刊わたぼうし」の印刷、発送をお願いします。

印刷は370部、私に50部、後は羽咋へ送っていただけないでしょうか。

〒926-0831 七尾市青山町ろ部22番

青山彩光苑・桶屋 善一

- ・地球儀の裏へ走って来たニュース 114p
- ・公約の賞味期限はすぐに来る 115p
- ・底辺のくらしラーメン店が混み 69p